兵庫県南部地震

被災地で巡回供養

本山・地元の46人で諷経

妙心寺派

兵庫県南部地震の月忌に当たる十七日、家屋倒壊や震災後の火事によって最も大きな被害があった神戸市長田区で臨済宗妙心寺派の僧侶による犠牲者供養が営まれた。同派兵庫教区住職らの呼びかけに本山が応え、妙心寺派として法要を営んだもので、約二時間半かけて震災の傷跡も生々しい被災現場を巡回し、供養の諷経を行なった。

この日の巡回供養は神足守正観音寺住職（明石市）らが呼びかけていたもの。宗務本所でも被災地で追悼行事を計画していたが、地元で準備が進んでいることから、これに合流し、本山と兵庫教区挙げての法要となった。

当日は地元から川本昭道宗議会議員、大西道裕所長ら兵庫教区の僧侶三十一人（南禅寺派の一人を含む）が出席。さらに本山からは兵庫県南部地震被災者救援対策本部の副本部長でもある羽賀文圭総務部長ら本山役員十一人が雲水姿で参加した。また遠く岐阜県からも青年僧ら四人が荷担し、総勢四十六人を数えた。

午後一時、一行は羽賀総務部長を引手としてＪＲ鷹取駅の南口を出発、ＪＲ線の南を東に進み、至るところに震災の爪痕を残す街を諷経して歩いた。震災一カ月目とあって、被災地には犠牲者のために花を捧げる遺族も多かったが、供養の読経を申し出ると涙を流して感謝する姿もみられた。

さらに二班に分かれ、一方は海側を、他方はＪＲ線の北の被災地を東進。ＪＲ新長田駅を経て、地震の揺れと火災で街区全体が廃虚と化した菅原通（ＪＲ兵庫駅の西）で再び合流し、瓦礫の山に分け入って犠牲者のために花が供えられている場所で供養の読経を行なった。

そして最後に鉄の枠組みだけが僅かに焼け残ったアーケードの屋根の下で大悲咒、観音経などを諷経しつつ行道を厳修し、今回の大震災の犠牲となった数多くの人々の冥福を祈った。

法要後、神足観音寺住職が「我々がまず最初にできるボランティア活動はお経を読んで犠牲者を供養すること。今後は各方面と連絡をとりあって、被災者の精神的なケアにも取り組みたい」と挨拶。

また羽賀総務部長は「被災者の皆さんにとって、これからがいよいよ大変な時期。地元教区と力を合わせ、この時期を乗り切れるようできる限りのお手伝いをしたい」と語り、一派として継続的に被災者支援に取り組んでゆく考えを明らかにした。

瓦礫の山に分け入り犠牲者供養の読経を行なった【写真は省略】

“あつあつ”を一万食

「生駒聖天さん」の大根焼き

寶山寺青年会が灘区で奉仕

“生駒の聖天さん”として知られる真言律宗・大本山寶山寺に集う青年信者で結成する、寶山寺青年会（上田全宏会長＝(株)上田技研社長）が十八、十九の二日間、神戸市灘区区民ホール横の都賀川公園でふるふき大根一万人分の

炊き出しボランティアを行なった。

兵庫県南部地震発生後、同会地元の人々が集まり会議を開き、自分達に何ができるのかを何度も話し合った。その結果、毎年十二月一日の恒例行事となっている竇山寺境内での「厄除け開運の大根焚き」を被災地で行なうことになった。当初は大根一万分だけの予定だったが、炊き出しの話聞いた和歌山県の同会メンバーで御坊のJA職員や熊野本宮町消防団員、あずまや旅館主人らの有志が町内、知り合いなどにも積極的に援助物資の募集を呼び掛け、ボランティアの輪は広がった。

前日までに同会会員の(株)下西製作所(下西巖社長)を通じて、大根のほか、供花六百束、饅頭千五百個、米四斗、菓子段ボール十箱が集められた。

その間メンバーは数日間、不眠不休でその他の援助物資である水六〇〇リットル、日本酒一升瓶百本等を用意する一方、発電機、灯油、プロパンガス、四尺釜、キャンピングカーの手配など炊き出しの準備におわれた。

当日、作業着に長靴姿の会員達は総勢三十人で結団式を行ない、午前三時に竇山寺を出発。同五時に現地に入りテント、釜などの設置をし、同九時半には集まった神戸の人達に炊きたての温かい大根が振る舞われた。

同会では事前に各ラジオ局を通じて炊き出しを広報していたため、同会の予想を超える人出となり、両日とも供花、饅頭、菓子は午前中で、ふろふき大根も午後二時には予定分を配り終えることになった。

現地ではガス、水道が使用不可能なうえに野菜が不足。瀬戸内海からの寒風が都賀川を遡り、会場となった都賀川公園では指がかじかむ寒さとなったが、白い湯気をたてる大根は集まった神戸の人達に「体が温まる」と特に喜ばれた。

また、しきび・色花などの供花を求める声も多く、現地では花不足が深刻になっていることもうかがわれた。

上田会長は「今回の地震を知ったとき、どこで起きてもおかしくない出来事だと実感しました。事前に何度も話し合いましたが、我々はあくまでボランティアをさせていただく立場です。できる限りのことを精いっぱいさせていただきます。現地に入り、あまりの被害に呆然となりましたが、神戸の方々の元気、ボランティアの方々の頑張りに逆に我々が勇気づけられました。忘れられようとしていた日本人の思いやりの心を見たような気がします」と語る。

「体が温まる」と喜ばれたふろふき大根の炊き出し [写真は省略]

温かい食事炊き出し

梅松塾生らが東灘区で

大本

兵庫県南部地震発生の翌日から被災地へ災害救援奉仕隊を派遣している大本教団(出口聖子教主)では八日から十一日まで、神戸市東灘区の避難所で温かい豚汁とご飯の炊き出し奉仕を行なった。

教団では震災発生当初、同奉仕隊が救援物資を直接、避難所へ届けるなどしていたが、二月に入ってから救援対策の組織を再編成して、より継続的な救援活動を行なっていく体制を整備した。

今回の奉仕隊派遣にあたっては、パンやおにぎりの食事が続く避難生活で温かい食事をとってもらおうと、東灘区役所とも連絡をとり具体的な派遣計画を決定。

八日に第一次の奉仕隊が本山第一小学校で昼食時に千食、九日には第二次同隊が本山南中学校で千二百食の炊き出しを行なった。

九日は奥原能梅松塾長を隊長に佐藤光春青年部長、森平一成特派宣伝使、十二人の梅松塾生をはじめ本部職員、口丹波主会の青年部員ら総勢二十四人がワゴン車三台、トラック一台に用具や材料を積み込んで、午前五時に天恩郷(京都府亀岡市)を出発。同九時前に本山南中学校に到着した。

この日は天候にも恵まれ、校庭ではドッジボールを楽しむ子どもたちの姿も。奉仕隊は大釜三口で豚汁、五升炊きの炊飯器十二台でご飯を調理し、午前十一時半の昼食時間前には一般のボランティアたちが、同中学校向かいの田中保育園、田中児童館に避難している人たちや近隣住民にも食事の提供をハンドスピーカーで呼びかけた。

昼食時間になると鍋や容器を手にした人々がテント前に列をなし、梅松塾生は「がんばってください」と声をかけながら豚汁、ご飯を手渡していた。正午すぎには同中学校の生徒らも姿を見せ、友人らと校庭でおいしそうに箸をすすめていた。

なお第三および四次の奉仕隊は十日（昼食）に御影高校で千二百食、十一日（夕食）に福地小学校で千八百食の食事をそれぞれ提供した。

東灘区の避難所で温かい豚汁とご飯の炊き出しを奉仕【写真は省略】

文化財にも救援の手が

廃棄・散逸の防止へ

文化庁管理下に委員会設置

この度、兵庫県南部地震で被災した文化財を救援しようと、文化庁施設等機関及び文化財・美術関係団体の連携協力により阪神・淡路大震災被災文化財等救援委員会（杉下隆一郎会長、東京都台東区上野公園一三ノ二七）が設置された。

同会の活動内容は被災した古美術品を専門家の手で運び出し、安全な博物館などに一時保管。今後に予想される貴重な文化財の廃棄・散逸を防止するというもの。

表装具、仏像などの古美術品は各寺社、美術館、博物館、一般企業、個人など様々な立場で所有されているが、このボランティア活動は全ての所有者を対象とし、あくまでも文化財保護のために行なわれるものである。

すでに二月初めに調査隊が被災地に入り古文化財の被害状況の調査を始めているが、倒壊した家屋からの搬出や届け出のない古美術品もあるとみられることから、正確な実態を掴むまでの調査の難航が予想されている。

現在、同委員会では古美術品を被災地から運び出す技術者を募集中。破損した古美術品もあることから、正確に被害を見きわめる専門知識が必要不可欠となる。

同委員会の救援活動は文化庁の管理下に置かれ、活躍が期待されている。また、神戸芸術工科大学（神戸市西区学園西町八ノ一）にも現地本部が設置され、各所有者からの被害届など、情報収集を行なっている。

詳しくは同委員会まで。F A X = 東京〇三（三八二三）四九二二。